

388
109

今井壽道先生遺稿

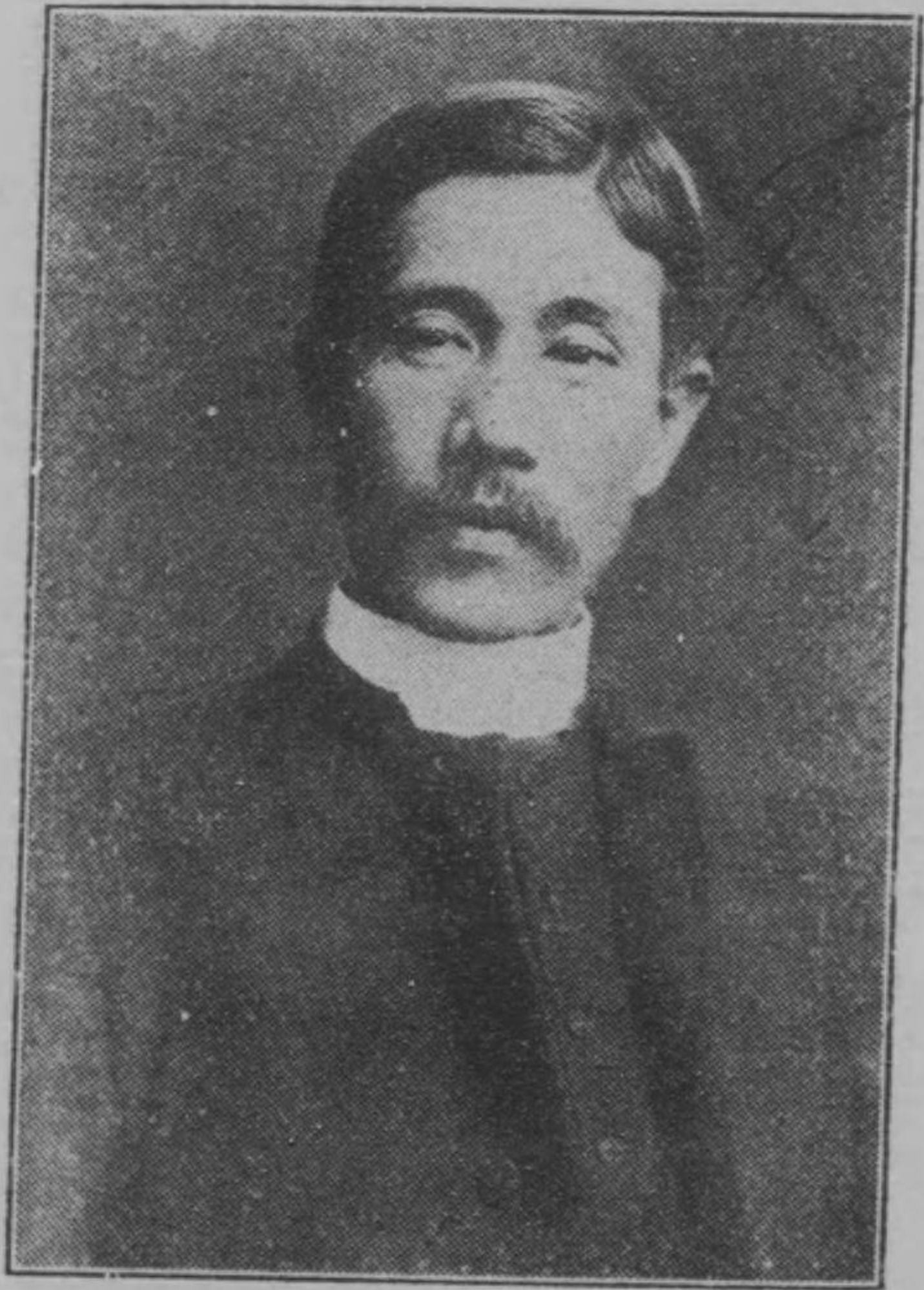
キリストの體



始



388-109

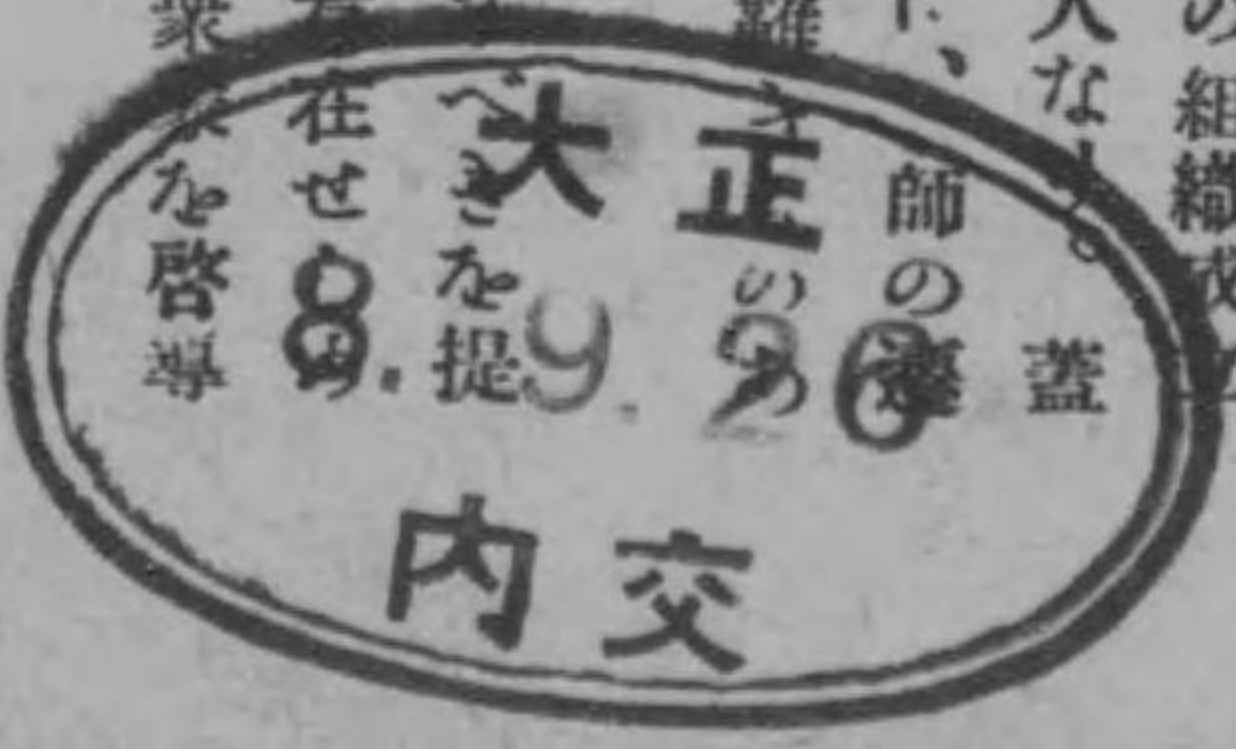


故神學博士今井壽道師

本書の出版に就て

聖公會神學院長神學博士今井壽道長老は、大正八年九月三日、齡未だ耳順に達せざる有爲の材幹を以て、主の召をうけ遷逝せられたり。師は我が日本聖公會の組織成立前より今日に至る迄、常に公會に於ける木鐸として最も重きをなしたるの人なり。蓋し師が日本聖公會の第一人たりしは十指の指す所なると共に、師の遺逝は實に公會の一大損失なるは争ふべからず。然も大能者の攝理は測り知り難き事なり。今はたゞ師を用ひて其榮光を現はし給へる主を讃嘆すべきのみ。

傳へ聞く、日本聖公會の組織成立當時、本教會の名稱を日本聖公會と命名すべきを提議せしは實に師なりしと云ふ。蓋し師は我が聖公會を、眞に聖公會として存在せしむる所多く、日本聖公會の今日ある、實に師に負ふ所尠しきや。



1
 此點に於て、師が數年前、雜誌『神學の研究』第二卷第三號の「紙上に寄せられたりし『キリストの體と』題する一篇の教會論は、師を記憶せんとする者の、當に三誦すべき價值あるものなるを疑はざるなり。

余や若輩、師と事を共に談ずるの位置にある者に非ず。また師弟の關係も無く、日本聖公會の聖職傳道師中において師との交誼は寧ろ薄き事情の下にあるものなり。たゞ微才をも顧みず些々たる一小雜誌「東京教報」によりて、聊か我が聖公會をして眞に聖公會たるの實を具へしめんが爲に努力しつゝあるものとして、師の志のありし所を、臆測するを得たりと信ずるものなり。因て以て師の教會論を一層世に紹介せんと欲して止む能はざるものあり。

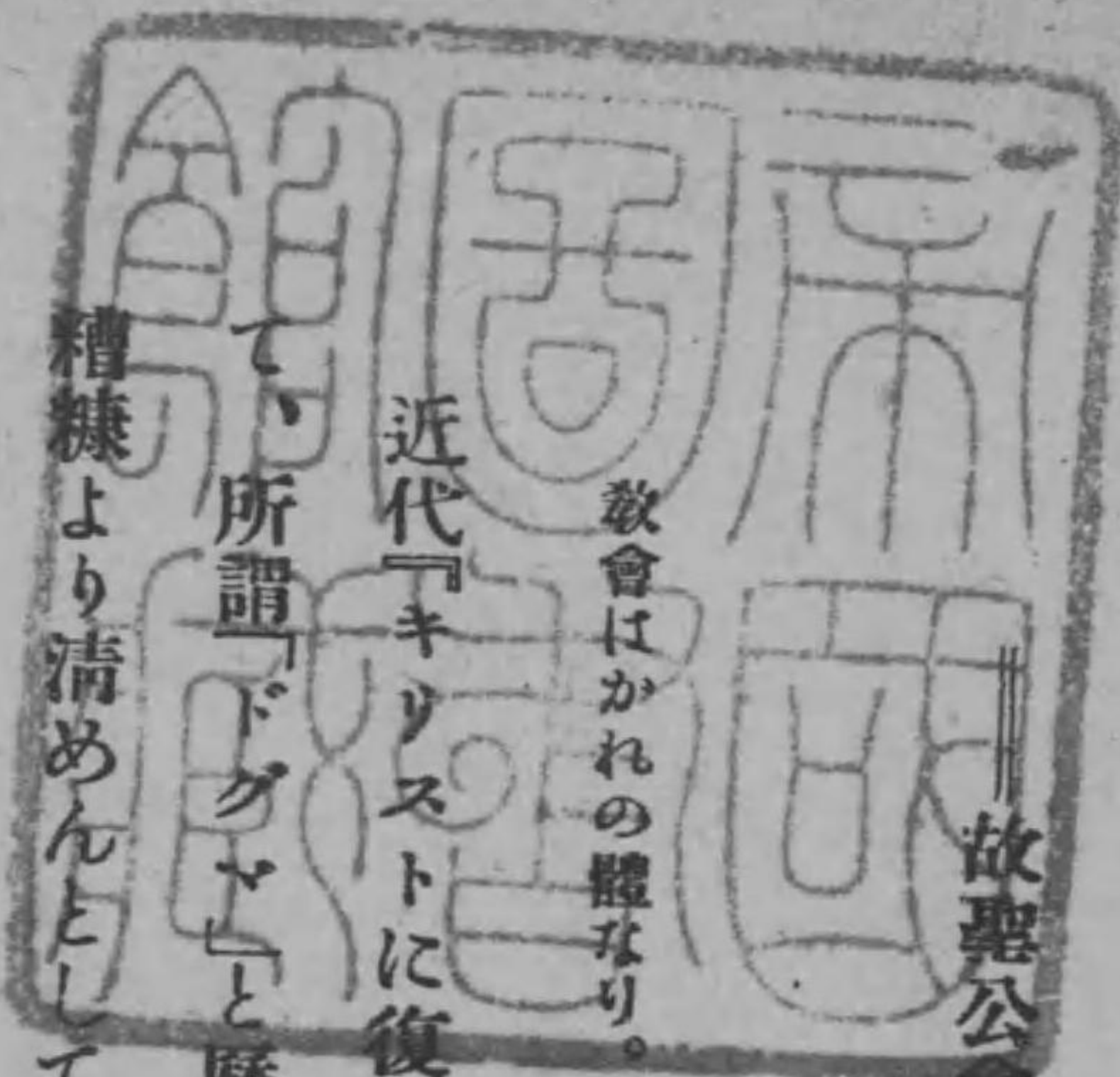
斯るが故に、余は『神學の研究』主幹に乞ふ所あり、乃ち其快諾を得、師の論文を出版するの権利を獲たり。依て茲に之を上梓し、公會に廣く讀まるゝに至らんことを希望す。而して他意あることなし。後日師の文章を廣く蒐集して、全集の如きものを出版せんとせらるゝ人あらば、余は喜んで此出版の権利を譲り、本書を絶版となすべきを約す。

大正八年九月下浣

後學 貫民之介しるす

キリストの體 (教會論)

故聖公會神學院長神學博士今井壽道師遺稿



教會はかれの體なり。萬物を以て萬物に満しむる者の満る所なり。(弗二〇廿三)

近代「キリストに復歸せよ」と呼應する聲の此所彼所に起るに及びて、所謂「ドグマ」と歴史との分裂を強め、歴史の精核を「ドグマ」の糟糠より清めんとして、後者の爲に前者を排除せんとする趨勢は教會問題にも及ぼせるものゝ如し。更に最近には實際的方面より教派

1 合同論の大に勃興するありて、キリストの大祈禱(約十七〇)が今

にも實現せられんかの如く歡喜する者も頗多なるに至れり。此等の事實が果して如何なる未來を神學又は教會組織の上に産出し來るべきかは、今日猶ほ未知の數に屬すと雖も、新に教會に關する問題の研究に歸りて、公平なる理解に達すべき努力を吾人に促すものたるや明なり。故に吾人は右の事實を記憶して先づ左の問題を提出することを適當なりと思惟す。

一、教會に關するキリスト自身の意志設計は何なりしか

抑もキリストの偉業が二千年に垂爲とする年代を経て、今猶ほ其新鮮なる生命を發揮しつゝある事實は、古來哲學者道德家政治家の

事業及び其後の歴史に比して甚しき差を有す。哲學・美術・政治若くは道德上の大偉材が出現したるは古來東西に其倫尠からずと雖も、其事業は概して一代の偉觀たるに止まり、偶々其門下に英材の輩出するありて之を繼承したる場合にも、或は其師の事業に估せざる状態に陥るか、或は全く其師と傾趣を異にしたる方面に開發轉進するを常とし、キリストの事業が其教會により萬世不變の忠愛服従を以て繼續さるゝ如き例は未だ曾て發見されず。此の事實より論斷する時は、キリストと教會との關係には特殊の性質を有する事及び此の如き教會の存在はあつから其宗祖の意志設計を説明するに足るものありと曰ふことを得べく、某論者の如くに『キリストは單に當時の

弊風を改革し、倫理の大本を明白にすることを本意としたるまでなるに、後世其門徒等が其祖師の單純なる教旨に精密なる教理及び實踐規定を追加して、複雑なる教義と形式的組織を設くるに至りたるなり』と斷言する如き論據を是認すべき餘地なきが如し。然りと雖も吾人が此の問題を公平に新らしく研究する順序としては、しばらく此等一切の論點を離れて、歴史的に之を再考するを合理とす。

若しキリストにして自ら自己一代の事業を永久に繼續し擴張せんが爲め、此世に一の社會を建設し、之に自己の事業・主張・教義を委任したりとすれば、教會は、此の如き計畫による委任を受けたるものとして、正當に其存在の權利を有するのみならず、其の委任された

る事業任務に對しては終始之に忠實なるべき職責を有す。而して教會が其委任權に基て一統の信仰告白を決定し、且つ之を世界人心に要求することは其職責を萬世に遂行する上に必要の行爲なりと云ふべし。されば「教會は果してキリストの設計に基きて存在するものなるや否や」を決定することは教會論に於ける先決問題たるや固より言を俟ず。而して吾人が此先決問題を研究するに當て、先づ之が材料を福音書に求むることは至當の行爲なるべし。

今四福音書に傳はれる所を摘要すれば、キリストの公生涯は最初ヨハネの其れと大差なく(可一〇十四、十五。太三〇二二)、悔改と信仰の宣傳に専心して到る所熱心傾聽の群衆に圍遶され居たりき。而

して彼は其間に十二人を召し、民衆を教へたる餘暇には彼らを教訓し、又漸次に二人づゝ彼らを派遣して傳道に従事せしめ居たりき。然るに當時社會の司導者たりし祭司學者の輩が、漸次キリストに對して反抗の心を生ずるに至り、キリストは彼らの嫉妬慊惡の念が日に高まり行く割合にいよゝゝ故らに之を避けて其態度を一變し、一般社會に對する宣教行動の翼を收めて却て退隱的方針を採り、僅少なる弟子等の教訓に熱中して、遂には十二人の外またキリストの身邊に集る者なきに到れり。而して茲に注意すべき一の事實は、此等の十二人が、夫の百夫長やカナンの一婦人四十二年の血漏患者の如き信仰熱烈の人々に比すれば、信仰に於て此の特色なきに拘らず、此

等の篤信者等は福音史上に忽ち顯れ又忽ち消えて、却て薄信痴鈍を再三再四譴責されたる使徒等のみが、始終一貫してキリストと偕に居り、『天國の奧義』を示啓さるゝに至りたる事とす。キリストが其使徒を選びに當て一個の標準を有したることは明なれども、此の標準はキリスト自身すらも驚歎せしほどなる堅信熱誠の其れにあらずして、却てペテロ以下の人物即ち『汝の信仰汝を救へり』との賞賛を受るに價せざりしのみならず『爾曹何を信なきか』と責められたる者の心に使徒たる標準に合ふべき資格を認め、之を天國建設の基本として其の宣傳したる天國の奧義を密に教へたりし事實には、吾人をして深く考慮せしむべき何かの意味なくんばあらず。キリストは

單純熱烈の信仰を祝福せり。而も天國の使命を委任したるは却て之と別種の人物なりしなり。

更にキリストが十二人又は七十人を派遣する場合に與へたる訓示を玩味すれば、使徒等の任務が決して其の時代に限れるものにあらずして、或る永久的使命を有したりしことを發見すべし。而して此はキリストが此等少數者の教育を以て最重事業となしたる行爲及び比較的に痴鈍なる信仰の人物を選抜したる事實と共に、昇天前に於ける世界的委任の果然なるを豫想せしむるに足るものなり。更にキリストが此の委任と同時に、若くは其以前にバプテスマを施すこと、キリストの教旨を守れと命すること、赦罪と懲戒の二個の鍵をも委

任せんと語りし事等は、此の永久的使命の性質を説明し得て十分なりと云ふべし。

今少しく之を論述すれば、若しキリストにして單に一代の宗教的革命又は道德的成功を期したりしならんには、彼はペテロ、ヤコブ、ヨハネの徒よりも、更に熱烈なる信仰者を集合して、彼らの勞力を中心とし、更に雷同附和して『ホザナ〜』と狂呼したる輩を壓きたる方上策なりしなり。然らざるも彼が退隱的能度を取て密に少數者の教訓に短き生涯を費すことをせずしていよく銳意に攻勢を取り、自ら道德の眞理を公衆に宣傳する行動を發展すべかりしなり。思ふにキリストの行動此に出ずして却て上述の如くなりし所以のも

のは、彼が其成功を一時代一國土に期せずして、別に大に設計する所ありしに由らずんばならず。若し吾人にして此の事實を認めざらんか、キリストは其目的に於て必然に失敗すべき愚策を採用し、其結果僅に三年にして、其公生涯を十字架上に終焉せしめたる者にして、他年其の三年の生涯と十字架の苦死が如何なる成功を世界に實現したりしにもせよ、此は全く當然の失敗より來れる僥倖にして、所謂過誤の功名に外ならず。而して此の如き僥倖は弟子等が其師よりも大なりしに由ると曰はざる可らず。替言すればキリストの失敗は弟子等の偉大なるによりて成功に變轉されたりしなり。然れども之に反して若しキリストが自己の事業と自覺したりし所は永久的に

して、其の採用したる政策は自己の世になき未來に於ける永久の機關を設備するに在りたりとすれば、彼は眞に超然たる一大方策を以て徐々に而かも確實に其豫期したる効果を世界に收め又收めつゝありと曰ふべきなり。

然り、彼は天國を唱へたり。而も彼は其の實現完成を一代の事業とせずして、之を其弟子等に委任せり、彼は自ら『種まく者』を以て任じ『芥種』を地にまくことを任とし、天國の基礎を靜に十二の人心に形成することを本旨とし、以て他日の成長發達を期したりしなり。而して彼は之を個人として特に信仰異凡の二三者に委任せず、却て一個の社會として團結し、一社會として成長開發するに適した

る者を選びたりし事も亦たおのづから明なりとす。然れども此の點に就ては更に陳述するの必要あるべし。

イ 十二使徒の選定及び其教育——キリストが其設計に適ふ者として選びたる十二人に就ては吾人既に之を述べたり。而して此等十二人の教育に三年間の大部分を消したることも茲に改めて説くの要なけん。唯だ其教を十二人に限り、イスラエル十二支派の其れに擬したる如きも亦『天國』といふ觀念と相俟て、根本的に社會の設立を意味したるものなることを附言せば足りなん。

ロ 聖靈の約束——キリストの十二人を教訓するや、世の師父たる者の最上の智に至大の熱誠を注ぎたりしことを俟すと雖も、彼

は更に約するに他の賜はるべき聖靈の示導教訓を以てせり。此の賜や實に智識と光明の内住的充實にして、彼ら十二人が當時理解したるが如くにして而も理解し得ざりし生命の眞理を、他日忽然自得して自己の有となさしむべきものとせられぬ。曰く『我名に託て父の遣さんとする訓慰師即ち聖靈は、衆理を爾曹に教へ、亦わが凡て爾曹に言しことを爾曹に憶起さしむべし』と。又曰く『我なほ爾曹に多く語るべきことあれども、今なんぢら曉ることを得ず、然れど彼すなはち眞理の靈の來らん時、爾曹を導きて凡の眞理を知らしむべし、そはかれ己に由て語るにあらず、其聞し所の事を爾曹にいひ、又來らんことを爾曹に示すべければなり』と。また曰く『譬喻を以

て此事を爾曹に語りしが、譬喩を用ゐずして爾曹に語り、父に就て明に示す時來らん』と。此の約束はキリストが其在世間弟子等の傳道區域に『イスラエルの迷へる羊』にのみ制限し、更に『父の約束し給ひし事』を待ちてエルサレムに停留すべきこと、聖靈の降臨によりて始て其眞使命を發見し、『エルサレム、ユダヤ全國サマリア及び地の極にまで』キリストの證者たるべしとの訓誨と共に、(一)キリストの事業の眞開展が弟子等の團體に委任されたる事、(二)其開展は世界的にして且つ永久なることを示すものと云ふべし。

ハ 天國の觀念——キリストが弟子等に委任したりしものは即ち福音の使命にして、此の福音がまた天國の使命なることは何人にも

異論なからん。而してキリストが與へたる天國の教義は其美はしき譬喩に發見せらる。此等譬喩に就ては一々略述すべき機會を有せずと雖も、其教旨の大主眼が天國とは讀で字の如く、天來の國又は神設神權の國にして、個人の分立と反したる一個の靈的社會の全體を意味せしこと明なり。加之『葡萄の樹』『羊の宰』等の如き形表を用てキリストと弟子との關係を教へたる中にも、おのづから天國が一個の社會にして、福音の使命は之によりて満足さるべきことを示して餘りありと曰ふべし。

天國と教會とは同一なるや否やの問題は、趣味深き研究に屬す。地上の天國即ち教會なりとの觀念はオーガステンの唱道し

たりし所にして、爾來の神學界が其感化により殆ど既定の眞理の如く教へたる所なれども、兩者の間に或る異同を認むべきものとする説は更に趣味深きものなり。天國は教會にあらす、教會は天國の全體にあらず、教會は寧ろ天國に對して牙營の本陣に對する關係を有すと曰ふべし。聊か爰に附言す。

却説、キリストが此の天國を以て徐々に必然に實現さるべきものとなしたると同時に、其實現の機會方法を擧て一個の永久的社會組織に委任したりしことも明にして、左の四點は特に之を保證するものなり。

い バプテスマ——バプテスマはキリストの創設にあらず、然れ

どもヨハネのバプテスマとキリストのバプテスマの間には天壤管ならざる懸隔を有せり。此の事實はヨハネが夙に感得したらし所、彼が只水のバプテスマを施すに反して、キリストのバプテスマには聖靈の降下による新生命の特色あることを語りし所なりとす。果然キリストは世を離れ去らんとする時、此のバプテスマを設立せり。馬太傳は明白に之を記し、馬可傳も之を暗示し、路加傳記者は之を其福音に録さざる代りに、使徒行傳の冒頭に於て之を録し、且つ此の命令が忠實に循守されたる歴史を綴れり。而して約翰傳はバプテスマの教義を録して其設置を豫想せしむ(三章)。此等の記録は單獨にも総合的にも共にバプテスマがキリストの設計したる靈的社會の門

戸たることを示す。

ろ 聖餐式——此式の設置に就ては共觀福音書皆之を録し、更に聖パウロの筆は其第四の傳説を遺留せり(哥前十一〇廿三至廿七)。此等の四記録は其大要に於て異なる所なし。而して約翰傳はバプテスマに於ける場合と同じ用意により、此式の設置を語らずして其教義を傳へたり(六章)。記者はバプテスマを以て天國に入るの門戸、天國に接觸し之を理解すべき生命の開始となしたりしと同じ筆法を以て、聖餐がマナに超越したる天來の糧、即ちキリストが其自己の肉と血を以て、バプテスマによりて生じたる靈の生命の營養の爲に供給するものとして之を教へたり。而してパウロは更に其要義を説

明して、此は『キリストの來る時まで』教會に於て守るべき聖禮典にして(哥前十一〇廿六)、其の恩恵はキリストを『同とに享る』こと(哥前十〇十六、十七)に在りて存し、此の一のパンと一の杯とは即ちキリストの體なる教會が永久に一體に保有され養はれ又強めらるる方法なりとせり。此の重き教義はパウロが其晩年にエピソ人に教訓したる言にも發見さるゝ如く、主一、信仰一、靈一、バプテスマ一なりとの根本義の中に、體の一なるを教へたる所と相照應して、聖餐が靈的社會の永久的結合に必須なる事を證明する所のものなり。

は 祈禱——キリストが自己を信する者に共通の祈禱を訓示し、

天父と彼らとの直接の交通の道として祈禱すべき事を教へ、更に丁寧反覆して祈禱の奨励となるべき説明教訓を吝まざりしことは、吾人之を共觀福音書に發見す。而して約翰傳に於ては、十字架に死すべき日の前夜……遺言遺訓の許多なりし一夜に五回も祈禱に言及したりし事を録せり。此は該書十四章乃至十六章を通讀する者の殊に心附く所なり。加之、吾人は馬太傳十八章十九二十兩節に於て、祈禱が個人として單獨に之を密室に行ふよりは、たとへ二三名なりともキリストの名の下に集合して心を合せ之を行ふ時に最も有力にして、密室の祈禱が天父の報賞を約さるゝ比して『我も偕に在り』てふ偉大崇高の意味を發見すべき教義を認む。此等の教訓を再三反

覆されたりし弟子等が深刻の印象を其心に與へられたりしは固より然あるべき事にて、彼らが之によりておのづから一個の禮拜的原則を理解し彼らにして若し忠實にキリストの遺訓を守らんには、決して個々の信仰的生涯にのみ由ることなく、衆心一和衆口一致して惟一の仲保者に頼り、惟一の聖靈に結ばれたる祈禱を、惟一の父に献げて、其社會の靈的生命を發揚するの道と爲し、個々の祈禱を衆合的祈禱に高調して祈禱の最高意義を現實せざる可らずとの信念に立つに至りしは決して怪むに足らず。ペンテコステ教會の一大特色が日々心を合せて祈る行爲に在りし所以のもの實に此信念に發源したるなり。

に 愛の誠——此題目に就ては多言するを要せず。『爾曹もし我を愛するならば我誠を守れ』との強き訴へを以て『爾曹互に相愛すべし』と命じたる言は、實に天國實現の道德的原則を意味するものにして、此の原則はまたキリストの設計が一個の社會組織を世に最重視したる證明なりとす。蓋しキリストが他の徳に超越したる意義を愛に附與し之を開發し之を鼓吹したる精神は、個々分立の信仰趣味にあらずして社會的結合の信仰的生命に存したるがためなるを推知し得なければなり。キリストは濁浪滔々の世に義の本領を説かざりしにあらずと雖も、而も愛を以て更に大なる必要條件たることを其弟子等に懇諭したりし心には、義の傾向が個人の清潔を主とするよ

り生ずる分離性あるに反して、愛が自己を忘れて調和結合の偉業に最も適合したる和合性を本色とするに由らずんばならず。

若し紙面の容るすあらんには以上の事實をペンテコステ以後の教會史に徴し此等の設計本旨が如何に忠實に循守され又開發されしかを記述せんも、紙面有限固より之を許さず。故に吾人は此等の研究を省略して、唯茲にはペンテコステの教會が其存在の意味を自覺し自己の天職を會得し其責任に興奮されたりし時、教會の設立はキリストの本旨なる事、其門戸はバプテスマ、其生命の營養はキリストの肉と血、其生命の呼吸は公同の祈禱、而して其靈的律法は愛なる事を、其確乎たる言動中に自白して疑はざりし事を附言し置くべし。

而して既に冗長に失したる前述の諸點を綜合すれば、キリストの本旨は、實に一個の永久なる社會組織を設くるに在りて、彼は其組織に關して詳細の訓示を遺さざりしと雖も、聖靈の約束中什分に之が設備を含め、他日の開發を其示導に委ねたりと結論せざるを得ず。

二、教會發達の根底には如何なる自覺ありしか

ペンテコステの教會は實に空前絶後の設立式を擧げたり。而して其新設の勢力がエルサレムを震撼して、福音の眞理は即日世界的に地中海沿岸三大陸の各地より來れる民衆に宣布されぬ。然りと雖も此の幼稚なる教會は其創業の日猶ほ淺くして既に幾多の危機に遭遇

せり。迫害の火はエルサレムの祭司學者等に投下され、タルソのソウロに煽られて、ステパノの殉教となり、教會々員の四散となりぬ。而も此の四散や即ち世界的傳道の門途にして、サマリア先づ風靡しソウロも亦改心せり。同時に此の發展はエルサレム教會を未踏の地に進ましめ、異邦人問題は忽ち彼らの死活問題として投下されぬ。これより先き教會はユダの代りにマツテヤを立てしが、續いて救恤問題の爲に七人を按手し、更にアンテオケにてはパウロ・バルナバの二人に按手し（彼らはエルサレムの使徒等に立てられしにあらざれども、使徒等が之を以て聖靈自身の任命と認むべき特殊の理由を有したるものなり）。而してキリストの教會が永くユダヤ教の障壁中

に存立すべきか、將た世界的に開發すべきか、替言すれば教會はキリストの委任に對して活すべきか死すべきかの問題が投下されたる時、從來ユダヤ教の空氣中に生涯したりしペテロ・ヤコブの如きすらも、パウロ、バルナバの一派と全然同一の見解を下し、第一回の教會々議は爰に明確なる教書を起草して之を普く頒布するに至れり。而して其教書の權威を最も強く主張したる文字は『聖靈と我儕と』の數字に存す(徒十五〇廿八)。此一語實に教會の自覺を最も明晰に又最も莊重に宣言したるものにして、其斷々乎たる教會的意識が其の言行を以てキリストの本旨による聖靈の内住的示導に在ることを告白したるものとす。教會はペンテコステ日以降實に此の自覺

を以て一切の問題を處理したるなりき。さればペンテコステ日以来教會の組織に與へられたる開發は悉く『聖靈と我儕と』と稱し得たる教會の權威に據て遂行されたるものにして、此の如き行動處決はまたキリスト自身によつて豫定されたる後日の發達なりしと云ふべきなり。キリストの命じたりし世界的運動が、異邦人問題及び其他組織上に提起されたる疑問と危機とを免れざりしことは、神子の無限智にあらざるも亦之を洞見するに難からざりし必然的經過にして、此等の諸事件の解決が同時にまたキリストの永久的設計に死活問題たるべきことも焉ぞ不意偶然の事なりとせんや。然るにキリストは之に對して此の遺訓を與ふる所なく、唯だ聖靈が幼弱無經驗の少數

者を示導して一切の眞理を理解せしむべきことを約して満足せり。吾人は是に於てか『天國の鍵』即ち恩恵と懲戒の二大權能が悉く聖靈の降下と同時に全體としての教會に授與されしことを知るなり。

基督教の宗教的權威は教會に在るか聖書に在るかとの問題は、十六世紀以後の教界に討論されたる所なれども吾人は其解釋を左程難しと思はず。聖書は元來教會が内住の聖靈の示導によつて、同じ聖靈のインスピレーションを多數の宗教文學中に認めたる所により、「カノン」撰定の當時俗間の歸依多大なりしものをすつ排斥して、永久に其聰明の撰を成功したりしものなれば、聖書は過去に然りし如く、現在にも、將來にも、基督教の實踐道德及び信仰之道の眞理を

判定すべき標準なること勿論なり。然りと雖も聖書の未だ撰定されざりし時代に在て、當初よりキリストの權能を實施したりし者が教會なりし事、信仰及道德の標準として聖書のカノンを撰定したるものも亦同じ教會なりし事實は、如何なる事由の爲にも抹殺す可らざるものなりとす。但し吾人が此の權威の所在を全體としての教會に認むるは止を得ざる事なり。吾人は東西分裂以後の不幸なる歴史の永く繼續したりし後に至て、僅些なる憑據より法王不可誤權の教理を以て權威の所在となしたる天主教會の主張に従ふこと能はず。初代の全公會々議は、プロテスタントの如くに『我は聖書を信ず』と告白せず、又天主教會の如くに『我は法王の不可誤を信ず』と告

白せず、唯だ『我は聖靈を信ず』と告白せり。蓋し教會の自覺は『聖靈と我儕と』の數字に包含さる、之より以上の權威なく又之より以下の權威をも自覺せざりしなり。

三、聖パウロの教會觀

使徒パウロが其教會觀に於て年と共に發達したる事實は、茲に一言する價ありと信ず。何となれば非教會主義の唱道者等はパウロの職事の初期に於て教會觀の單純なるに心酔し、之を以て此の大使徒の生涯の信仰なるかの如くに解釋する事を好み、彼の晩年の書簡を以て後人の加筆又は偽作とすることを常とすればなり。然れども

吾人が此の問題を什分に理解するにはパウロの教會觀のみを研究して止むべきにあらず、須らく其世界觀否な寧ろ終末觀の發達と併て研究するを要す。蓋しパウロは最初キリストの再臨を以て自己在世中にも現はるべしとまでに近く接迫したる事件と信じたれば、當時彼の眼中には地上に長き歴史を演出すべき教會なく、從て其政治組織等に精細の用意を必要とせざりしなり。此事實は帖撒羅尼迦書（紀元五十一年）に教會論なくして終末論を要旨としたるに見るべし。然るに再臨は其豫期せし如くに急速ならざるのみか、再臨前に福音を宣傳し了るべき世界の地圖が其眼界にいよ／＼廣がり來るを見るや、コリントに送れる書簡（紀元五十五年）には、終末觀に遠距

離を暗示し始め、之に代るに教會を政治懲戒其の他實際問題及び教會其物の本質を教示する事に其の教訓の要點を移動せしめたりき。而して彼の牧會的教訓の立場は、年と共に終末問題より教會觀に進み行かじめ、彼の殘年最早幾何ならずして、教會存続の前途いよいよ遼遠なるを洞見するに及びては、益々如何なる問題よりも教會問題を重要なりと認め、終に其最後の文章としては教會書簡を綴るに至れるなり(提摩太前書及び提多書は紀元六十二年、提摩太後書は紀元六十四年と認む)。されば吾人はパウロの教會觀が其の初期の書簡に於てよりも、彼がキリストの再臨及び教會の任務が渺茫たる長き未來を意味し、却て自己在世の時間が日に縮まり行くことを明

確に深甚に感得したる晩年の書簡に多き理由を見るべく、又教會の永久的設備に對する用意が其晩年に發達したりし自然の徑路を知るべし。是故にパウロの教會論が晩年の書簡に發見さるゝ事實を怪訝すべき些少の論據なきのみならず、其終末觀の發達より之を打算するも、亦此の如き事實の最も自然なるを認めざるを得ず。

吾人にして以上の事實を記憶することは、保羅の生涯の初期に屬する書簡に頼りて誤謬に陥る弊害より吾人を救ふものなりとして、さて其教會論の大體を摘要すれば、

一 教會とは信仰を有する者(教職平信徒)の結合されたるキリストの體、また神の家なり。而して此の信仰は個々の信念を包むと同

時に其重要なる點に於てはパウロの時既に歴史的信仰となれるものを公共的に告白する事にてありき。和譯聖書に之を信仰の道と譯さねばならぬ文字こそ之れなれ。彼は之を福音と稱し、時に『我が福音』と稱しぬ。而して此の福音は決して自己の創作又は發見による眞理にあらずして、歴史的に相傳したるものなる事は、彼が『之を授けられし所』又は『受けし所』と曰へるにても明なり（哥前十一〇廿三同十五〇一至十一提前三〇十六）。されば此の福音即ち「信仰の道」は全體として永久不變の性質を有するものにして、パウロ自身と雖も之に服従すべく自認し、決して何人も之を改竄すべからざるものと確信したる所なりとす（拉一〇六至九）。彼は此の信仰と自

己の意見との間には明白なる區別を附し、以て命令と忠告との差を示したりき。（哥前七〇六、十、廿五、四十參考）。

二 教會とは秩序ある組織なり。パウロは信仰者が共同唯一の歴史的信仰を懷抱するのみを以て足れりとせず、此等の信仰者が形體ある組織の中に此の公同の信仰を保有すべきを主張せり。例せば哥林多前書十二章以下十四章に於ける教訓に於て、各肢體の分業を極言すると同時に、其分業は隨意別個の行爲にあらずして却て『凡事正しく且つ次序に循ひて行ふべし』と曰るが如き之れなり。彼は此立場より教職者の尊敬さるべき事を教へ（撒前五〇十二）分離分派の惡事なることを戒しめ（羅十六〇十七）、更に自己の平生か謙讓の

品性を旨としたるにも拘らず事苟くも此の組織の根底を危くする如きものあるに當ては、斷乎として自己の權威を主張して忌憚せざりき(哥前七〇十七、同五〇三至五、提前一〇廿)。彼が忠實に教會の形態秩序組織を維持したることは多言を要せずして明なり。

三 教會とはサクラメントより成るものなり。或人はパウロが二者への外、自らバプテスマを施さざりしとの事實を論據として洗禮無用論を唱ふと雖も此は甚しき謬見なり。彼は異邦人の使徒として専ら福音を宣傳することを以て任じ、教會を未設の地に建ることを以て重任となしたれば、授洗の職事は分業的に之を同行者に委任して、一方には自己の本分に専心する事を努め、他方には(哥林多

教會に於る如く)彼が最も熱血を注ぎて維持せんとしたる教會の形態的一致を幾分にも危くせざらん用意とせり(哥前一〇十五)。然りと雖も彼がエピソに於て執りたる行動を見れば(徒十九〇五、六)既にヨハネのバプテスマを受領したる者すらも、新にキリストの名に入るべきバプテスマを受ること及び同時に使徒たる自己の按手を受ることを必要と認め居たりしこと明なり。而して羅馬書加拉太書等に教へたるバプテスマの秘義及び其應用に就ては茲に特筆するまでもなき著明の事實なりとす。又彼が聖餐を守るに忠實なりしこと及び自ら之を執行したりし事は使徒行傳によりて推定さる(徒廿〇十一、廿七〇卅五)。而して其森嚴なる教義に至ては哥林多前書十一

章に之を見るべく、また此の聖餐が教會の一體なる本位の繼續營養に必須なる點も同じ書簡に之を發見す(十〇十五)。

吾人は冗長を避けて、パウロの一層神秘なる方面の教會觀を省略せり。此等は教會學上最も豊富高崇の思料を供給すと雖も、此の論文には必ずしも言及するを要せず。吾人が勉めて略言したる以上の理由によるも、パウロは教會に就て明白に三個の要素を固執せり。曰く歴史的信仰の共有、曰く階級ある聖職及び秩序ある組織の形體的統一、曰く二個のサクラメント及び使徒の按手之れなり。此の三要素は彼が世界の救済に對すると同じ熱情を以て維持したる所にし、彼は之を以てキリストに對する忠愛の赤誠より出る行爲となし

たりしことも亦決して疑ふべき餘地なし。

吾人は他の使徒等が教會に就て如何に教へしかに論及する必要なかるべし。希伯來書、彼得、約翰、猶太の諸書も亦た同じ教義を有することは讀者の知悉する所なればなり。

四、靈的と云ふ文字の誤解

以上の梗概は吾人をして教會の成立に超自然及び自然の二要素あることを悟らしむ。超自然とは聖靈内住の示導、自然とは歴史の產出したる危機若くは境遇これなり。而して兩者は共にキリストが其事業の世界的實現に豫備したる教會其物によりて採用され、又教會

其物を形成發達せしめたるものとす。吾人は以上の二大要素が共に形體的組織を有する靈的社會の成立動作及び發達に實在するを認めざるを得ず。故に吾人は超自然的方面よりするも、自然的方面よりするも、教會が有形體なるべきを認むる理由に於て毫も躊躇すべき所なし。然れども、茲に靈的[・]てふ文字に誤られて、吾人の所説に満足せざる者もあるべければ、吾人は序ながら之に言及せざる可らず。靈的信仰又は靈的宗教と云ふが如き文字は其解釋の如何によりては甚しき迷想を媒介するものなり。吾人は福音の信仰が靈的なる事キリストの天國が靈的[・]王國なる事を確信する上に於て人後に落ちざらんと竊に努力する者なりと雖も、而も吾人の所謂靈的なる文字は

或論者の理解する所と同じからざるを遺憾とす。今一言以て之を曰ば、凡そ事物には靈を離れて形體なく、形體を離れて靈なきなり。用語或は弊あらんかなれども、現世に於て吾人に理解し得らるゝ限り、吾人の本性が靈と肉との和合なる以上、此の靈形一致の眞理は到底動すべからず。此は近代に至りてフェネルやゼームスの如き鴻儒深思想家が靈と物との二界を接近せしめたるを待たずして、基督教の眞理が常に表白し來れるものなり。吾人は他日此の問題に就て或は大方に質することあるべしと雖も、今は單に教會論に返りて之を曰んに、宗教は元來神が靈なる大本によりて必然に靈的なるや勿論なれども、其靈的なるものは或る形式の中に包有さるゝを常とす。

自然宗教も其高崇の部分に於て靈的なり、而も自然は之が形式を成せり。聖書は靈的真理の更に明白なる啓示なり、而も此の啓示は記者の文章てふ形式中に秘藏せらる。キリストを神子又ロゴスと信ずる者は、彼を以て靈的示現の最上なるものと認む。而もインカーネーションとは人間的形式中に此のロゴスを包めることにあらずや。更に聖靈のはたらきは如何。ロゴスの自現の客觀的なる代りに、聖靈の聖なる示啓は主觀的なりと雖も、而も此の示啓は個人及び教會の形式を離れて何處にか之を發見すべき。個人の心理的形式と教會の組織的形式とを離れて聖靈の動作感應は吾人之を見んと欲するも亦得べからざるなり。靈的宗教を主唱する者は即ち此の個人の心理的形

式に動作する方面にのみ偏したるものなること固より明白なれども此の形式は心理的なるが故に一層靈的なるにはあらず。此種の靈感は高山の光景、妙樂の感動、海岸の瞑想、其他何か雄大なるもの、何か森嚴なるもの、何か幽邃なるもの、何か非常なるもの、爲に生ずるものにして、此等は個人の靈的經驗に偉大の要素なりとは雖も此は必ずしも基督教に限れるものにあらず。何となれば此は實に一切の宗教の高崇なる人格が古往今來經驗し得たりし所にして、之が爲に靈的基督教を云爲するは我田引水の誹を免れざる可ければなり。基督教はキリストにして、キリストの體は教會なり。人は孤獨の爲に造られずして社交的に造らる。『人ひとりなるは可らず』との神

の旨はエデンの往時より吾人に定まれる事なり。吾人々類の宗教も他の一切と同じく、個人格にして社交的なる本性と離れず。眞の社交は個人を破壊せずして之を圓滿にす、孤獨の信仰は偏見に陥らざるまでも不具の開発を免れず、社交的信仰が其宗教的社會に理解され定義され實現されて茲に圓滿なる個人の靈的宗教を成育せしむ。以上の思想は靈的の二字によりて教會の社會的組織を無視せざらん爲に必要なり。吾人は自己の愛よりも愛國心又は團體心が眞の個人を發揮することを知る。此の-high社會的愛心は即ち聖別されて爰に「聖徒の交はり」てふ至上の靈的宗教に到達するものなることを知らざる可らず。個人の眞價値も亦た眞の社會的組織を待て始めて全く

45

發見さるゝものなればなり。靈的宗教は靈的社交の組織的形式中に圓滿に發見され又發揮さるゝものなり。吾人は「神と我」てふ文字を此上なく愛慕し且つ尊敬すと雖も、此の神と此の我とは決して孤獨分立の信仰に全くは發見されざるものなりと信ず。非教會主義の孤立的信仰は、野蠻時代に社會觀念の缺乏し居たる幼稚の人類が自己の快樂満足の外、如何なる生命の意義をも發見せざりしと同じく、信仰の道に於て幼稚なる宗教的快樂満足に退化したるものとや曰はん。之と同じく靈的を標榜して教會組織を歴史的に重要視せざる者も、非教會主義を唱へざるまでも亦五十歩百歩の差のみ。

五、有形的教會とは何ぞ

吾人はキリストの意志既に社會組織を設計し、ペンテコステ以後の教會は即ち此の設計に基くものなることを證言し、靈的宗教として吾人の信仰が組織的形式即ち社交的信仰の上に全ふせらるべきことにも言及せり。故に吾人は之より所謂組織的形式とは何ぞやの問題に移らざる可らず。此の問題の正しき解答は上述の研究の總合に外ならず。こと固より言ふまでもなしと雖も、教會合同問題の勃興したる今日、此の現時代を記憶して忌憚なき正直なる陳述を試むること亦た此の解答の範圍に屬せずと曰ふ可らず。

イ 教會はキリストを神且人として之を信じ、其救贖の事業を信

任しキリストに従ふ生涯を以てキリストに似、品性に達せんと努むる人類の社會にして、洗禮に開始され、聖餐に養はれ、祈禱を共にし、愛を律法とす。聖靈は此の教會に内住し、キリストの生命目的を表現す。教會は之によりて眞實に『インカーネーションの擴張』たることを全ふす。キリストの生命は之によりて世上に繼續され又表現さる。キリストは之が首腦、教會はキリストの體なり。吾人は聖パウロが體てふ文字を採用したる所を考究するも、容易に或る有機的組織の外形性、統一性、包容性、を言顯すものなることを認め得べし。

ロ 此教會は聖なり。聖き靈の内住と示導とは之を當然に聖なら

しむ。イスラエルの歴史に表示されたる聖民族の理想は、眞のメシヤを首腦とする教會之を實現したるなり。教會は眞のイスラエルなり『聖き民、王なる祭司』なり。

ハ 教會はキリストの示啓したる眞理を聖靈の示導によりて公的に告白す。此の告白は即ち教理の大本なり。時代の變遷、人文の進化は教理的解釋の上に變遷發達を必要とす、而も此の發達改造は同じ告白の中に包有されたる眞理の新しき表白又は新しき方面の發見なり。此の公同の告白は社會的使仰、教會心の發表なり。教會にして既に存在すればまた此の教會心の發表なかるべからず。教會に進化發達すべし、告白の大本は動かす可らず。解説は

49

二 教會は其社會的組織として其の自己の構成を決定せり。如何なる社會にても、一たび社會として存在すれば同時に其構成を必須とす。此の構成はまた其社會の任務の實施、目的の遂行に必要な役員を第一とす。此の役員は即ち聖職なり。靈の職事に專任する役員なり。此の役員の選舉任命の方法も亦内住の聖靈之を示導せり。一たび此の示導による決定が行はれしのは、此の選任の方法又は役務の改變は、同じ聖靈の示導によりて教會が全體として是認したる場合の外に行はる可らず。如何なる團體にても役員の既に立ちたるのち、會員が個人として自ら此の役員の事務に任ずることを許さず。秩序の法則は絶對に之を制限す。此の制限の解除は團體の破壊

なり。

ホ 教會は公なり、カソリコスなり。カソリコスとは個別に對する一般の義に始まり、轉じて異端分派に對する正統の義となれり。異端も分立も個別偏狹なりとの心よりなるべし。カソリコスなる教會はキリストの示啓したる真理の全體を永久に證明する事を以て任とす。教會がカソリコスなるは即ち個人の信仰的品性の完成、個人の靈的宗教の圓滿の發揮さるゝ機會なり。

へ 教會は惟一なり。惟一とは統一性に於て一なりとの義なり。ユニチーなりユニフォーミチーにあらず。此の本領は實にカソリコスなる本位を解釋する上に必要なり。社會が個人格を破壊せずし

て却て之を圓滿に開發せしむる目的の爲に、ユニチーがユニフォーミチーにあらざることを明確にするを必要とす。世界的統一のユニチーは各國民の國民性を尊重し、各個人の個人性を尊重し、此等の障害なき發達と分業と完成とを什分ならしむべき餘地を具備す。此の統一の主腦はキリストなり、一統の異にして同、同にして異なる本領はキリストの肢體の全部に存在す。

ト 教會はサクラメントの組織なり、靈を形に表現し、形式の中に靈を包有する機關なり。バプテスマも聖餐も之が爲に教會に適合したる方法たるなり。一はユニチーの個人的應用、他はユニチーの個人的維持營養なり。主一、信一、洗一、靈一の教義は此のユニチ

一の本領に於てサクラメント的なるを示すものなり。

(附言、吾人が傳道的團體としての教會に言及せざりしは既にキリストの事業の委任繼續と云ふ中に含められたればなり)

六、吾人の立場

教會の形體的合同は苟も我が主キリスト在世最終の夜に於ける大祈禱を奉戴する者の寸時も忘る可らざるものなり。同時に此の合同は一時の時代思潮又は感情的興奮に刺激されて、キリストの意志に反するも、將た聖靈の示導によりて既に構成されたる所に戻るも、強て之を成立せしめんと試むべき事にあらず。問題は至大至高なり、故

に吾人は只忌憚なき正直なる意見の相互の交換と、冷靜無私なる相互の了解とによりて、衆心和合したる合同を期せざる可らず。之れ吾人が左に所信を開陳する動機なり。

吾人は再三反覆して教會の眞の立場が『聖靈と我儕と』の一語に盡くすることを唱へたり。吾人は此の立場が數世紀間維持されたりし後不幸にして分裂分派の歴史を生じたることを悲痛す。全公會々議は爾來得て開らく可らず、天下一統の權威ある宣言は、眞に高き意味に於て其機關を損せり。吾人は日本聖公會が、單にカンソコスなる教會の一統的本領内に、形體上の一大破片として存續するアングリカン公會の支體なることを自覺せざる可らず。今日の歴史的教會は

一として此の破片の一ならざるはなし。其の再び合して形體的に一となり、一統の交通を完全に具備するに至るまでは、破片は如何に大なるも破片にして全體にあらざることを覺悟するを要す。されば教會の權威ある宣言處決は回顧的にして、此の回顧的立場に於て信仰の本領を維持し、組織の要點を守り正しき洗禮によりて靈には現に一なるキリストの體が、形體的にも一統さるゝ春を待ざる可らず。

同時に教會の一統は國民的開發と相容るべきことを信じ、上述の大統一に違反せざる範圍に於て、日本の教會は日本的に開發することを期し得べし。此の開發は或は禮拜の細目、或は組織上の細目、

或は教義解説上の様式着眼點に於て、若くは大和魂と十字架との親しき結合によつて生ずる道德的實行の細目、其他の上に於て一種の特性を發揮せんことを期すべきなり。此れ實に天國の全く實現さるゝの日に各國民族がおのゝく獻ぐべき特殊の珍寶なればなり。此の範圍を超ゆれば即ち日本聖公會は聖にあらず又公にあらず又會にもあらざるなり。是故に吾人は合同の理想を日本の一國に置ずして世界に置き、現代の思潮にのみ委任せずして『聖靈と我儕と』てふ權威ある初代の歴史に回想す。吾人は實に此の立場に於て合同を歓迎するのみならず、日毎夜毎『聖國を臨ませたまへ』と祈る毎に、之を祈りつゝある者なり。

日本聖公會の立場とする所は上述の外に、其法憲最初の數箇條を列記せば即ち足りなん。

第一條 本教會ヲ日本聖公會ト稱ス

第二條 日本聖公會ハ新舊兩約ノ經典ヲ受ケ之ヲ神ノ啓示ニシテ救ヲ得ル要道ヲ悉ク載セタル者ト信ズ且ツニケア信經使徒信經ニ包括セル信仰ノ道ヲ公認ス

第三條 日本聖公會ハ主キリストノ命ジ給ヒシ教理ヲ説キ其自ラ

立テ給ヒシバプティスマ洗禮聖餐ノ二聖奠及其懲戒ヲ行フ

第四條 日本聖公會ハ使徒時代ヨリ繼承シタル監督、長老、執事エписコポノ三職位ヲ確守ス

吾人は以上の立場より吾人の敬愛する教會全體を一望すれば、合同の障害が容易に除去されざらんことを危懼する念を禁ずること能はず。

天主教會は中世以後に於る法王政治を確立せし以來、教會の權威を一人に集中して之を教會唯一の可見的主權、キリストの代官たりと主張せり。而して後世に法王不可誤の權能を定言するに及んで、いよ／＼此の統一的權威を一人に集めぬ。歐州の天下が羅馬帝國を失ひて一統の中心を失ひし後、羅馬が之に代て帝王主義を政教二途に主張したりし歴史には固より利益の大なるものあるべし。然れども吾人は此の如き統一主義が教會一統の眞義を破壊したることを悲

む。蓋し吾人は教會の權能を教會の全體に認め、天主公教會は之を一人に認む。彼我共に教會のカソリコス及び惟一を認むと雖も、吾人は地上の教會のみを以て教會の全體と認めず。彼は地上の一統に可見的主領を必要とすと唱へて、ペテロの首領説よりエクス・カテドラの決定を最上權となすと雖も、我は教會が幽明兩界に一統にして、其首領は人なる法王にあらずして『人なるキリスト』にあることを信ず。法王の代官權が使徒時代に夢想だもされざりし要求を以て教會一統の實を成さんとしたる結果、却て過去には分裂分派を債促し、將來には合同を難からしめたる責は、吾人が甚だ遺憾とする所なり。吾人は茲に法王制度が便利なりや否やを論ぜず。教義的必

要條件として主張さるゝことを悲しむなり。

此點に於て吾人の注目すべき問題は人間に免れ難き二種の傾向なり。一は即ち單に自己の理性に信賴し、之が探究にのみ依て真理に到達せんとする傾向、他は即ち一切を權威ある宣告に一任し、其一定の教義に全く服従して真理の確信に到達せんとする傾向之れなり。替言すれば前者は哲學より宗教的真理を捕へんとする心狀、後者は默示にのみ頼りて之を求めんとする心狀なり。正確に曰へば兩者共に基督教に專屬するものにあらず。然れども後者は基督教の智的自由動作を承認する精神に矛盾す。基督教は人間固有の機能の何物をも破壊せず却て之を聖別することを其本領とす。智は之れ人間

能力中最重なるものゝ一にして、此の心狀を無視して、悉く一人の權威に服従せしめんとする如きは、智的自由を非なりとして、服従にあらざる屈従を強るものにあらずや。法王權の主張は、實に人類の理性を絞殺して、而しのち始めて真に一統劃一の形體を維持し得べきものなり。

同時に吾人は他の心狀を全く是認すること能はず。權威ある示現と解釋とを認容することなしに、個人の理性が眞理の光明を全く認め得べしとの自由思想も亦之れ一大謬見なり。若し人類にして神よりの示啓なしに、自己の理性の獨力を以て神を發見し得たりとすれば、此の如く發見される神は眞の神にあらざること明なり。此は實

に不可能の事にして、無限を測量し得たりとするに同じければなり。されば此の種の心狀に屬する者は或は懷疑の中に迷ひ、或は個々異なるものを眞理として唱道し、一統的信仰より分離して、理性的迷信の間に徘徊せざるを得ず。此の種の心狀にのみ傾ける人々の所謂眞理の發見なるものは、たまく以て理性の失敗を表白するに過ぎず。一統の眞理は決して權威の承認なしに得て達すべからざるもの也。

其れ眞理は萬事の全局より總合されたる合計と歴史の一和したる宣告とに存す。之を一人の宣言に求め、或は之を個人の理性に求むるは共に之れ大なる迷誤にあらずや。されば吾人の教會一統の根本を一のキリストに置き、歴史的信仰の告白と聖書の所載と、初代の

開發とを憑據とする教會組織によりて、眞の統一を本願とし、如何なる種類の劃一をも排斥す、同時に又一統を要義として如何なる理由の分立をも非認す。而して此の統一の中央が若し形體的に必要なりとすれば、エルサレムに在るもアンテオケにあるも將たロマにあるも敢て吾人の問ふ所にあらず。

吾人は天主教會に對する評論中、既に暗々裡に自由派と稱せらるゝものに對する吾人の見解をも表白せり。吾人は固より教派分立を以て異端視するものにあらず。異端と分派との差は明々白々なり。吾人は分派を以て毫末も異端と同視せず、然れども同時に分派がキリストの教會の組織統一を破壊する行爲として痛切に之を悲しまざ

るを得ず。分裂分派には必ず之を生ずべき異説ありしや勿論なり。而も其異論が形態的一致を破壊して再び合同の業を至難ならしむるは實に恨事の極なりとす。古代に於ける東西兩教會の分裂の如き、十六世紀以後に於ける小教派分立の如き、公同的信仰に於て異ならざる限り、相異端視すべきものにあらずと雖も、プロテスタント諸派が公同の信仰に於て吾人と一なるにもせよ、歴史的教會の立場を承認せず、聖職問題に歴史的相傳の權威を認めざる以上は、日本聖公會とプロテスタント諸教派との合同難は決して感情の障害に止まらざるなり。之を些細の異同として度外視するは何れの教派より見ても決して正義正直の行爲にはあらず。彼が正直に歴史的監督の地

位を認むること能はざるが故に之を否認するも、我が之を正直に認むるが故に之を保守するも、共に双方の正直なる信認なりとすれば、此の正直なると否認とは同じく教會的良心の問題にして、如何なる教派と雖も此良心に反して行動すること能はざるや明白なり。故に彼らにも吾人にも只だ冷靜なる互の了解によりて、此の良心の一致を努むるに外なし。

吾人が以上の陳述中にグリーク・オースドックス教會を脱せしは、決して疎外したりしにあらず。吾人は冷靜なる研究が日本にも歐米にも現に該教會とアングリカン教會との間に、行はれつゝあることを知る。此の如き研究の好果を生せんには前途猶ほ遼遠なるべしと

雖も、而も之を開始したりしは實に合同の實現に一大發展の道を開始したるものと云ふべし。吾人は此の如き門戸がプロテスタント諸教派との間にも、歴史的研究の形式にて開始されんことを切望す。日本聖公會はアングリカン公會の特色を傳へられ、最も劃一的主張に遠ざかりて、包容的本領に忠實ならんことを期す。教會内に種々のチャーチマンシップを包容する事實は懸て合同の海牙府たるべき性質を發揮するに便利なる地位ならんことを希望す。

終りに一言すべき事は、分派分立が如何なる利益を生じたる過去現在を有するにもせよ、此の利益は決して分立の惡を善化するものにあらずと曰ふにあり。吾人は吾人と同じ合同の希望を有するキリ

スト教徒と共に、至上の悲痛と謙遜とを感じ、且つ自己中心の罪惡の有無を反省し、キリストの體と其信と其望との一なることを教習的生命の内外に全ふせられむことを一の聖靈によりて懇求努力せんことを希ふて止まざる者なり。

余は本論中。天主教教會其他の各教派に對して自由に批評を加へたる事及び此の評論中に不遜の文字をも妄用したる罪を謝す。然れども吾人は合同と了解との一の準備は互の同を知るよりも差を語るに在りと信す。此の差が遠慮なく評論され解釋されざる間、縱令相互の同をのみ見て暫らく相合する事ありとも、決して永久眞實の合同を成功すべきにあらず。吾人が忍んで苦言を爲すも亦止を得ざるなり。

大正八年九月廿三日印刷
大正八年九月廿七日發行

東京市京橋區明石町五十三番地
編輯兼發行人 實民之介
東京府西區葛飾町庚申一三六
印刷人 澤田文雄
東京府西區葛飾町庚申一三六
印刷所 學園印刷所

發行所 振替貯金口座東京三四四七一番 東京教報社



終

